資料２－１

教育ファームアンケートの概要（中間報告）

(1) 調査概要

1）調査目的

教育ファームが、参加者の農林水産業への理解増進、食生活や食料消費の改善、国産農林水産物の消費拡大にどの程度効果があるか定量的に評価することを目的とする。

2）調査項目

教育ファームについて、体験の内容、体験前後の農林水産業への理解、食生活・食料消費の内容、食材の購入行動と理由　等。

3）調査方法

- アンケートへの協力をご承諾いただいた教育ファームに対し、調査票（紙）を郵送。
- 体験、アンケート回収が終了した教育ファームから順次郵送回収。

4）配布・回収状況

体験種類	教育ファーム数(件)	予定票数	回収数*
農業	20	987	243
農業・畜産	1	80	37
畜産	11	620	70
水産	2	163	75
合計	34	1850	425

*2014 年 12 月 1 日時点

- 配布期間：2014 年 6 月 25 日～10 月 28 日
- 回収率：23.0%
- 今後回収予定票数：1050 票（予定票数のうち約 60%程度）

(2) 調査結果

1）教育ファーム参加経験者の特徴（速報）

① 農林水産業への理解について

- 農林漁業に対する正しい知識を持っている人が多い。（多面的機能(Q10)、自給率(Q16)）
- 「農林漁業者から話を聞いた経験」や「食や農林漁業関係のセミナーに参加した」ことがあるなど、より現場に近い場での学習経験がある人が多い。(Q3)

② 食生活・食料消費の変容について

- 「食事はなるべく残さず食べる」「なるべく日本産のものを食べる」といった傾向がある。(Q2)
- 教育ファームの体験活動をきっかけに、「食事はなるべく残さず食べる」「野菜を多く食べるなど栄養バランスのとれた食事を心がける」といった意識や行動の変化が生まれている。(Q9)

③ 国産農林水産物の消費拡大について

- 「作っている人を信頼できる」「国産のものを応援したい」といった意識から、国産品を選択している人が多い。(Q12)
- 中食や外食において、「日本産原材料が使用されていることが強調されている」ものを選択する傾向が、教育ファーム参加経験がない人より強い。(Q14,Q15)

④属性

- 「農林漁業が盛んな地域に住んでいる」「親や兄弟が農林漁業に従事したことがある」など、現場に近い経験を持つ人が多い。(Q4)

2）クロス集計分類

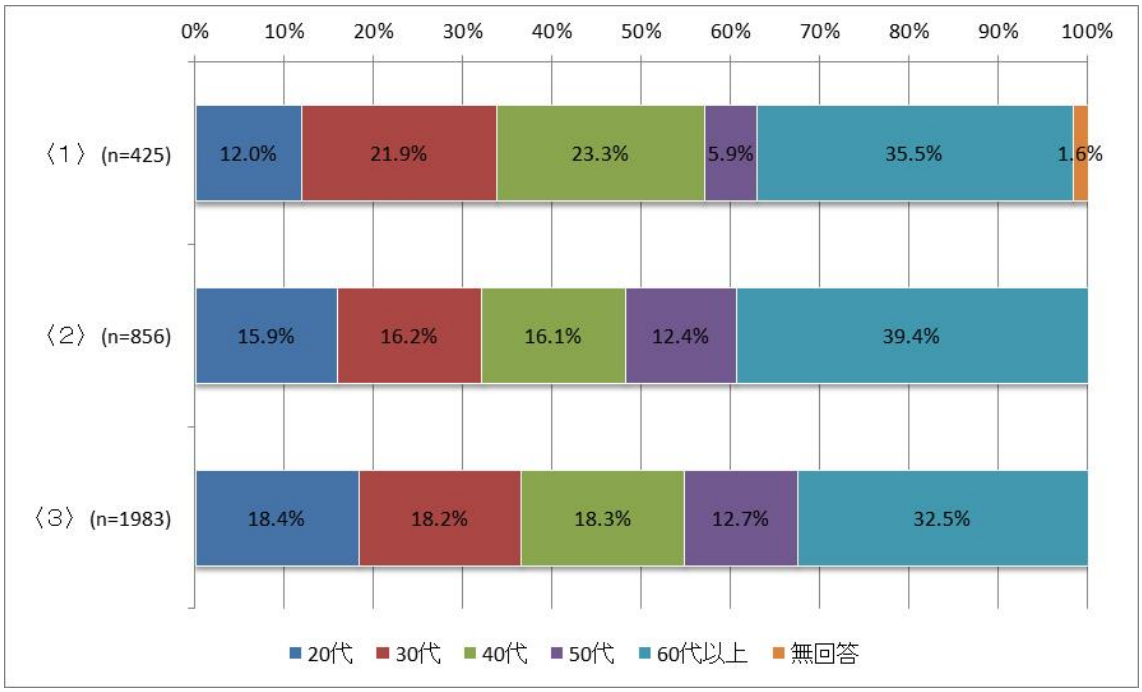
分類	回答者数
〈1〉 教育ファーム体験あり（紙アンケート）	４２５名
〈2〉 教育ファームを含め、何らかの農林漁業体験あり	８５６名
〈3〉 農林漁業体験が全くない	１９８３名

※（1）の回答者数は 12 月 1 日時点の回収数による。

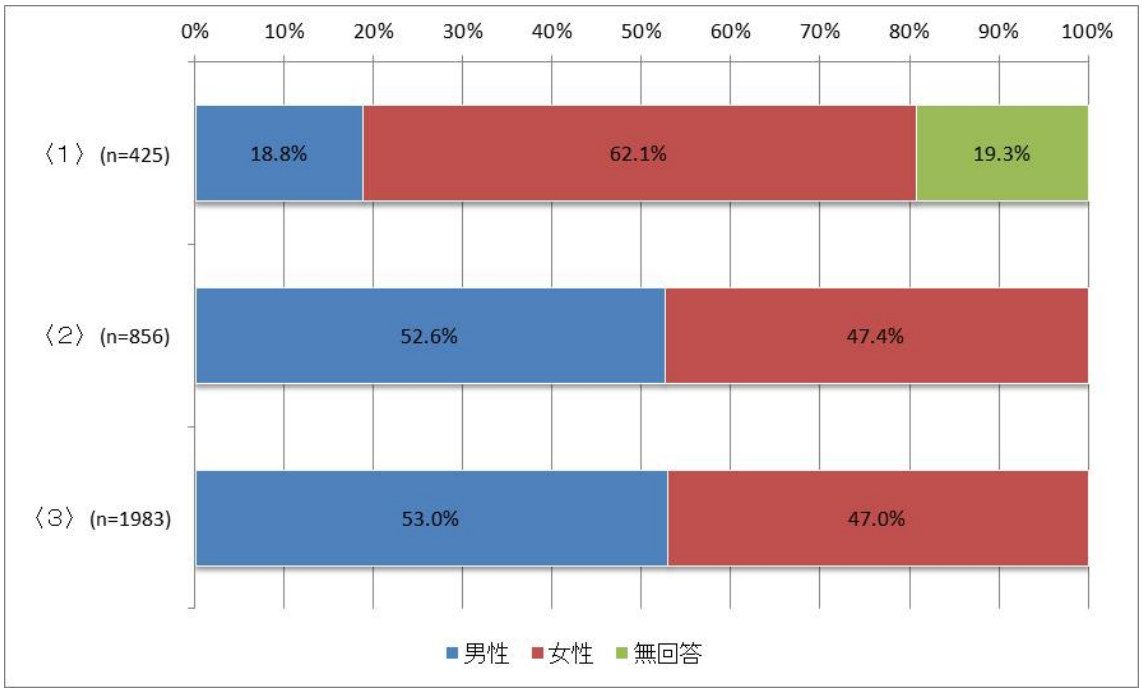
（2）（3）は、第 2 回食育推進施策に関する有識者会議（平成 26 年 7 月 15 日）資料３－３教育ファーム等体験活動に関するアンケート調査結果（WEB アンケート）による回答者。

3）調査結果

Q1a. 年齢

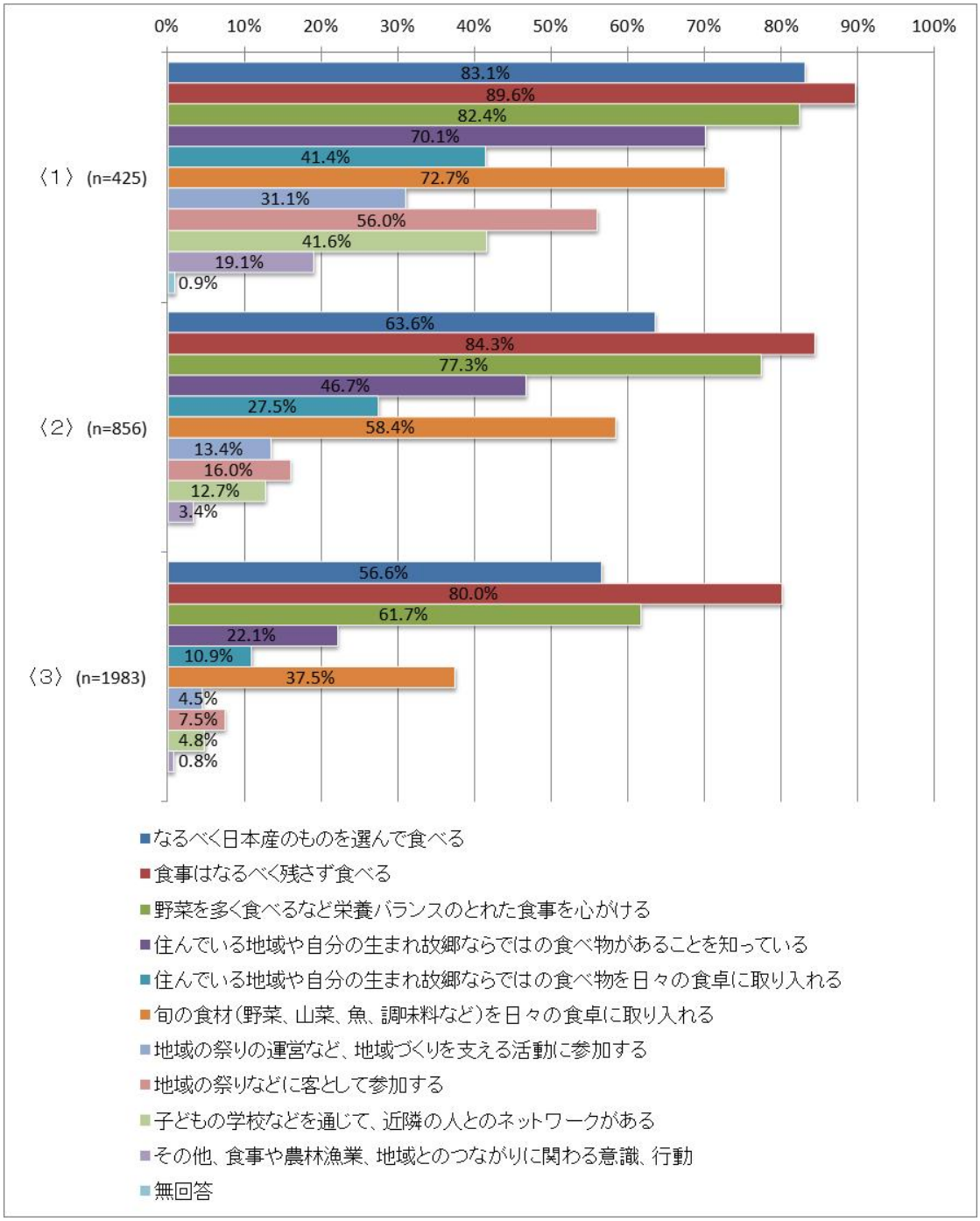


Q1b. 性別



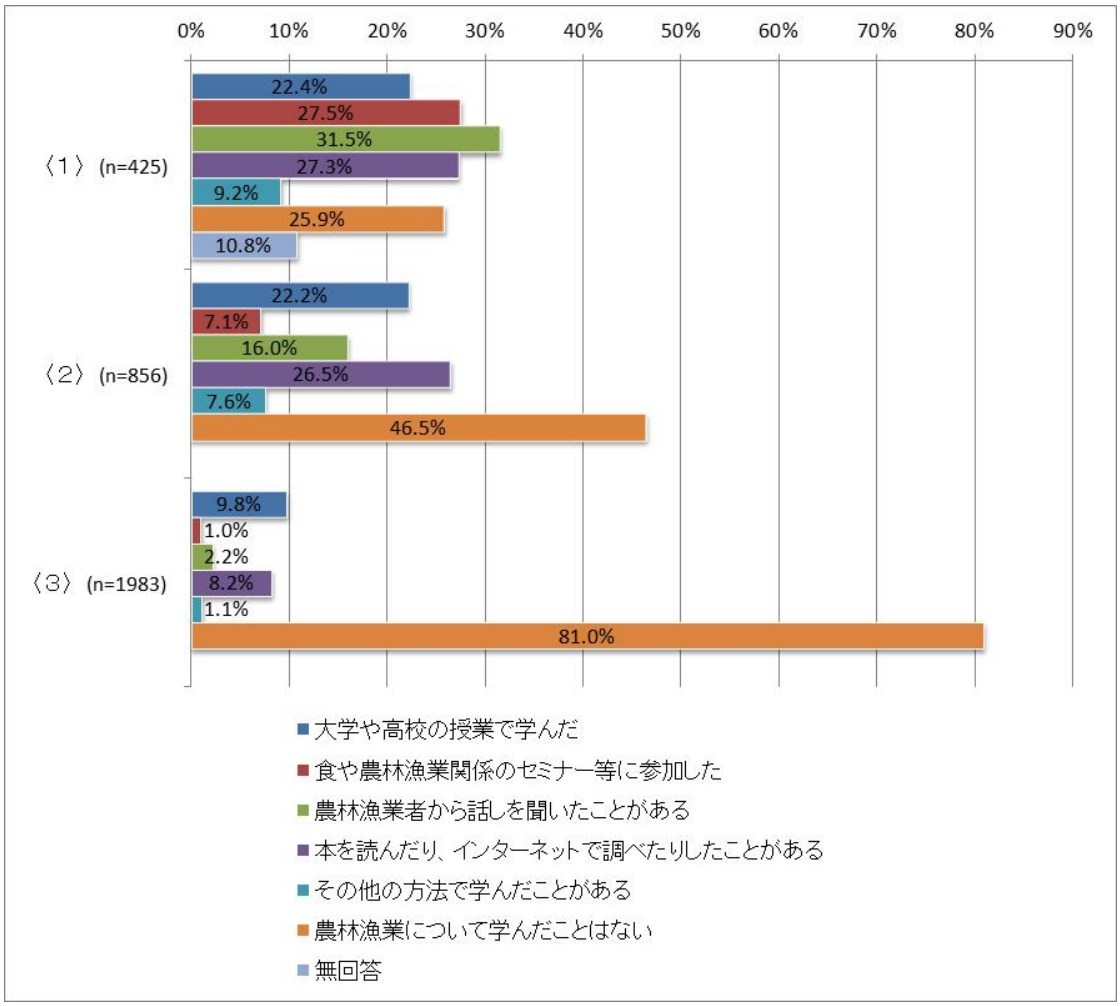
Q2. 普段の意識や行動、状況について（複数回答）

- 「食事はなるべく残さず食べる」ことは、どのグループも 80%以上の回答者が行っている。
- 「野菜を多く食べるなど栄養バランスのとれた食事を心がける」という点では、農業体験の経験があるグループ<1><2>がおよそ 80%の回答をしているのに対し、農業体験の経験がないグループ<3>では、60%あまりに留まった。また、「住んでいる地域や自分の生まれ故郷ならではの食べ物があることを知っている」、「旬の食材を日々の食卓に取り入れる」といった点でも、<1><2>のグループに比べ<3>のグループが低いという傾向が見られる。
- 教育ファームに参加した経験があるグループ<1>では、すべての回答において他のグループを上回っている。



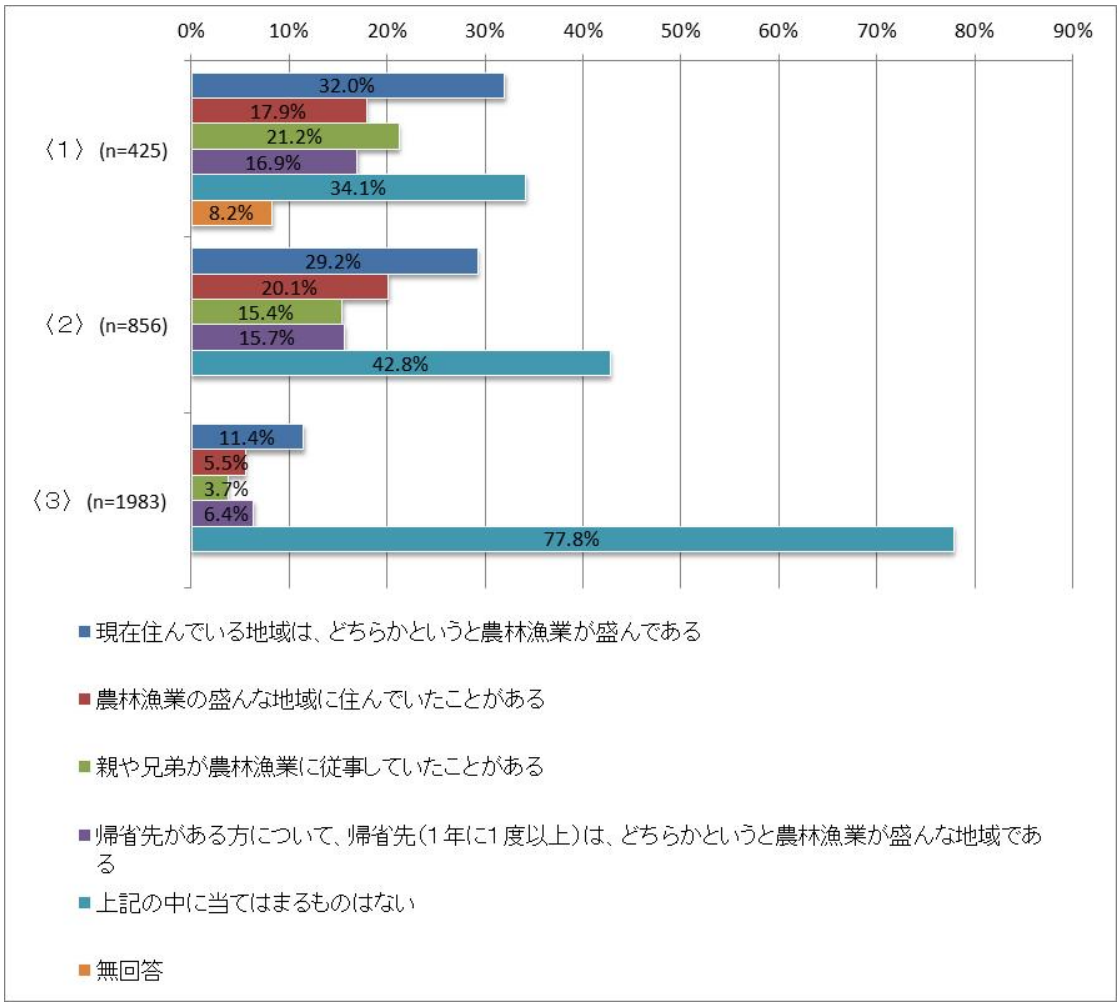
Q3. 農林漁業についての学習経験（複数回答）

- 農業体験の経験がないグループ<3>のおよそ 80%が「農林漁業について学んだことはない」と回答したのに対し、農業体験の経験があるグループ<1><2>は、半数以上の回答者がなんらかの形で農林漁業の学習経験があると回答している。
- 教育ファームに参加した経験があるグループ<1>では、「農林漁業者から話を聞いた経験がある」（31.5%）や、「食や農林漁業関係のセミナーに参加した」（27.5%）と回答した割合が、その他のグループよりも高くなっている。



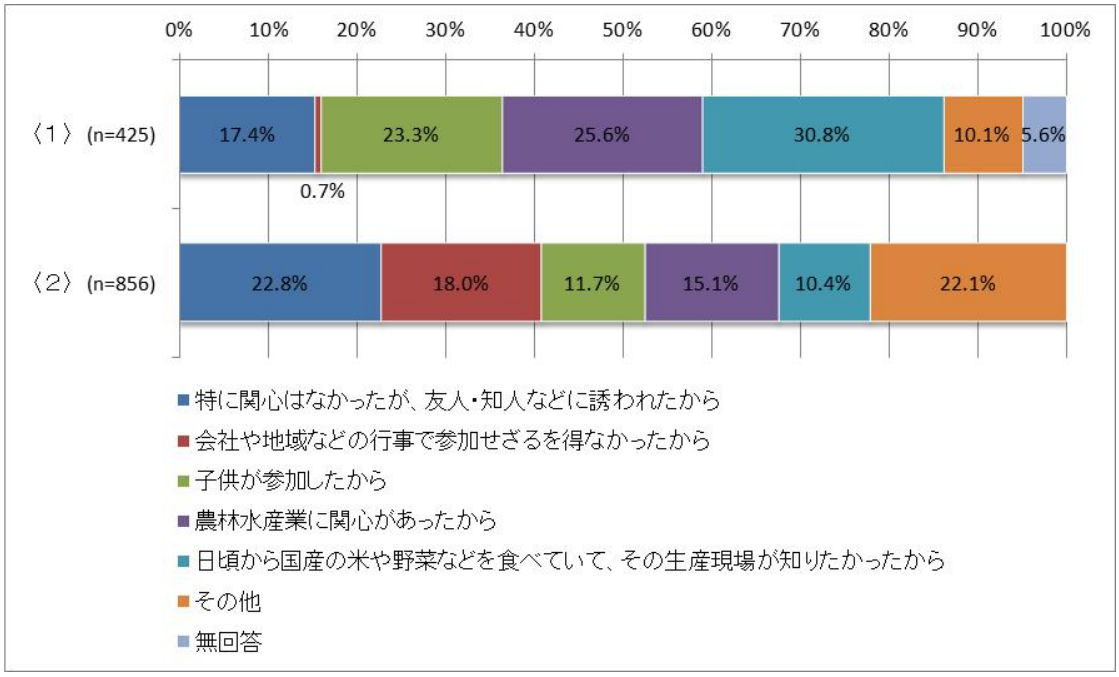
Q4. 農林漁業について（複数回答）

- 農業体験の経験があるグループ<1><2>は、「現在住んでいる地域は、どちらかというと農林漁業が盛んである」と回答する者の割合が約 30%となっており、農業体験の経験がないグループ<3>よりもそうした地域に住んでいる割合が高くなっている。
- 教育ファームに参加した経験があるグループ<1>では、「現在住んでいる地域は、どちらかというと農林漁業が盛んである」（32.0%）、「親や兄弟が農林漁業に従事していたことがある」（21.2%）といった回答が、他のグループに比べて高い。



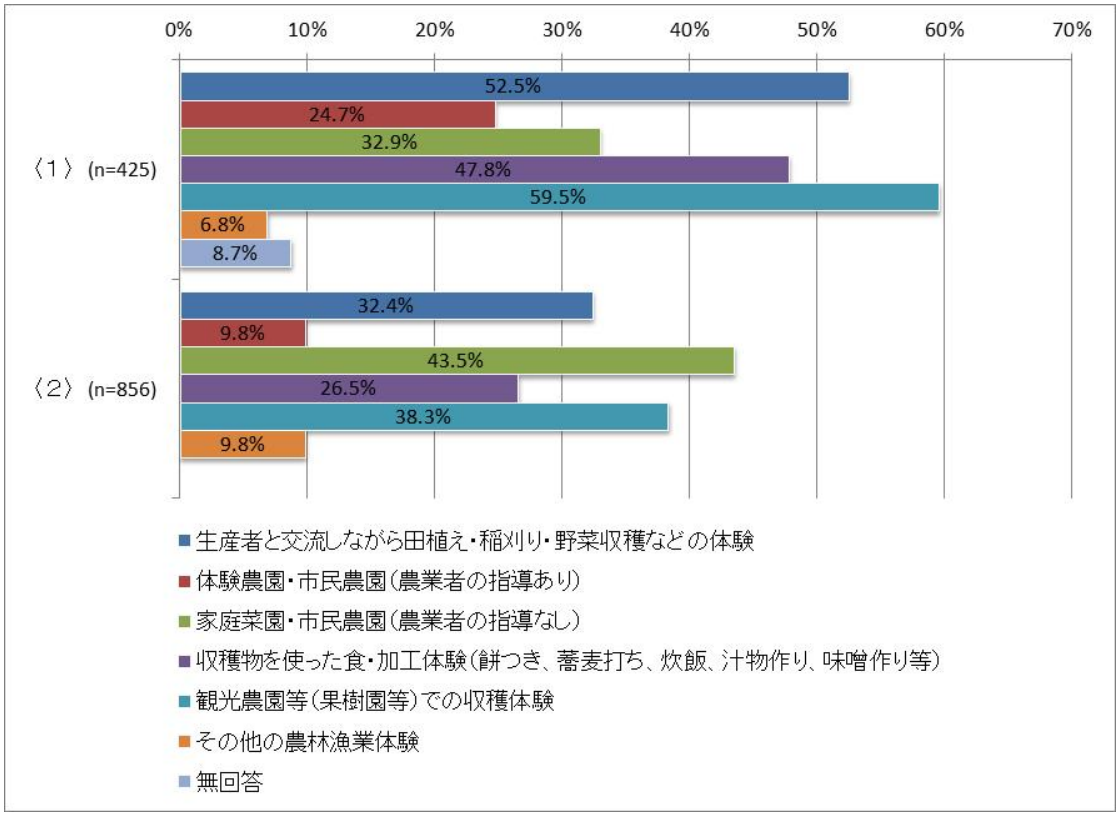
Q5. 農林漁業の体験活動に参加することになった理由

- グループ<2>において、「特に関心はなかったが、友人・知人などに誘われたから」（22.8%）という回答がもっとも多くなっている。
- グループ<1>では、「日頃から国産の米や野菜などを食べていて、その生産現場が知りたかったから」（30.3%）という回答がもっとも多くなっている。



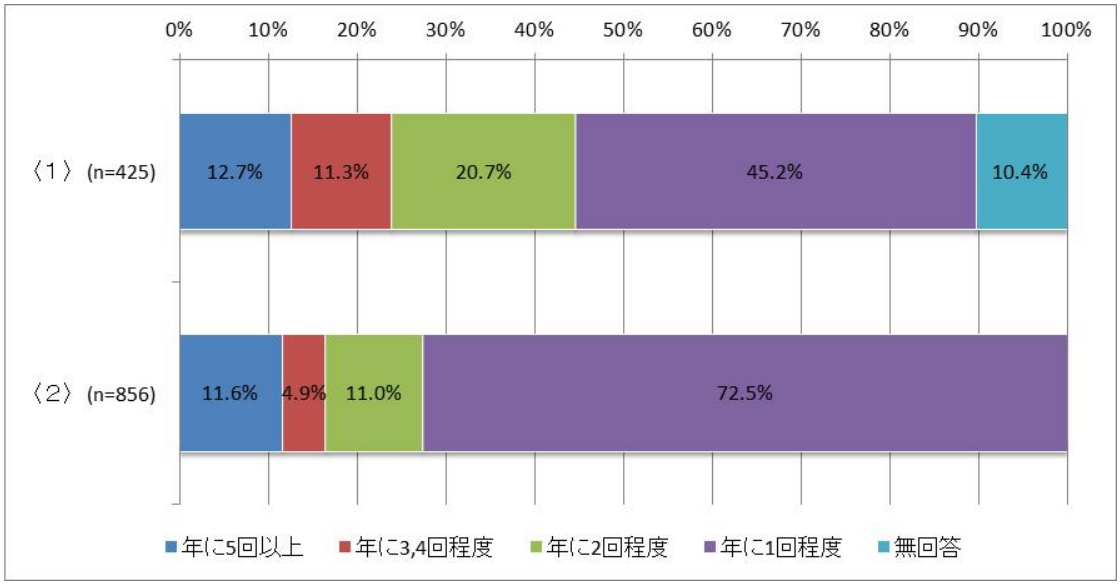
Q6. 農林漁業に関する体験活動への参加について（複数回答）

- 参加した体験活動の内容としては、グループ<1>では、「観光農園等（果樹園等）での収穫体験」がもっとも多く、次いで「生産者と交流しながら田植え・稲刈り・野菜収穫などの体験」が多くなっている。
- グループ<2>では、「家庭菜園・市民農園（農業者の指導なし）」がもっとも多く、次いで「観光農園等（果樹園等）での収穫体験」が多くなっている。



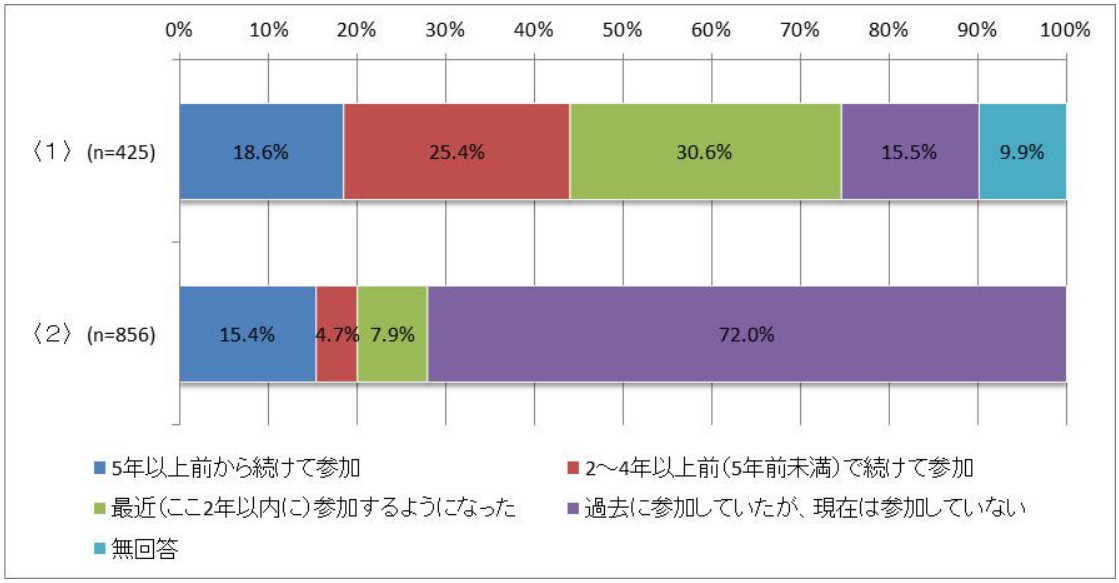
Q7. 農林漁業の体験活動への参加頻度

- どのグループも「年に１回程度」がもっとも多くなっている。
- 教育ファーム参加経験があるグループ<1>は、他のグループと比べて比較的参加頻度が高い回答が多いことが特徴的である。



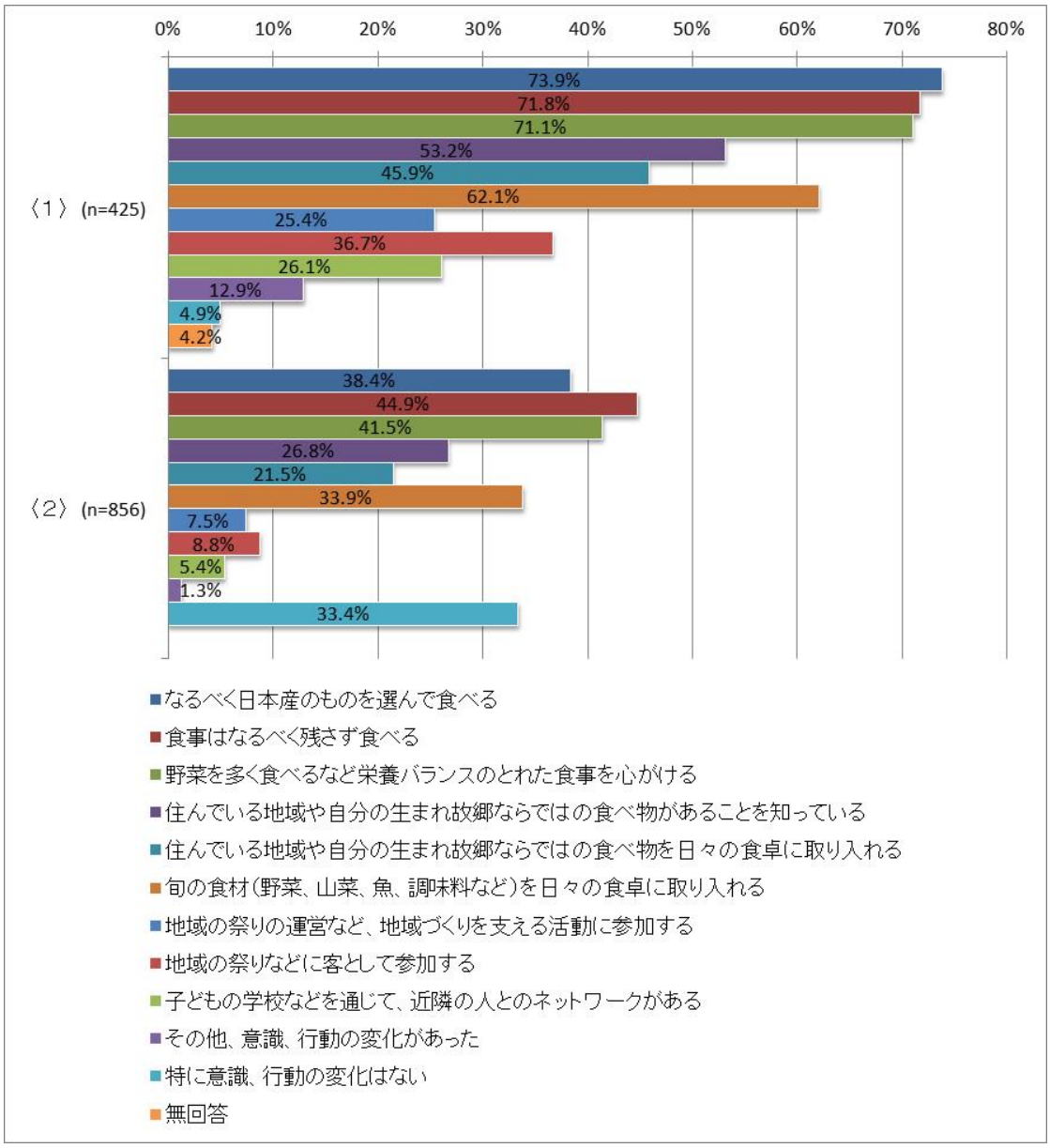
Q8. 農林漁業の体験活動への参加年数

- グループ<1>で、継続的に参加していると回答した者が多いことが特徴的である。
- グループ<2>は「過去に参加していたが、現在は参加していない」がもっとも多い回答であった。



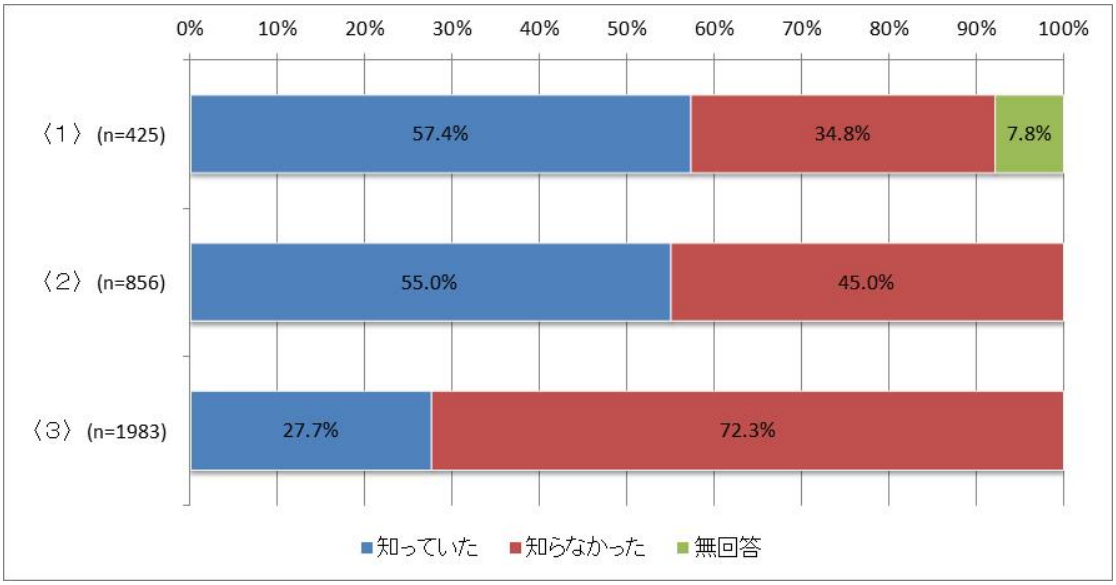
Q9. 農林漁業の体験活動に参加したことをきっかけに、より強く意識するようになったこと、機会が増加した行動、強まった状況（複数回答）

- 農林漁業の体験活動に参加したことをきっかけにした意識や行動の変化では、「なるべく日本産のものを選んで食べる」「食事はなるべく残さず食べる」、「野菜を多く食べるなど栄養バランスのとれた食事を心がける」と回答した者が多かった。
- その回答割合は、グループ<1>が<2>より高くなっていることが特徴である。



Q10. 農業・農村が多面的な機能を生み出していることについて

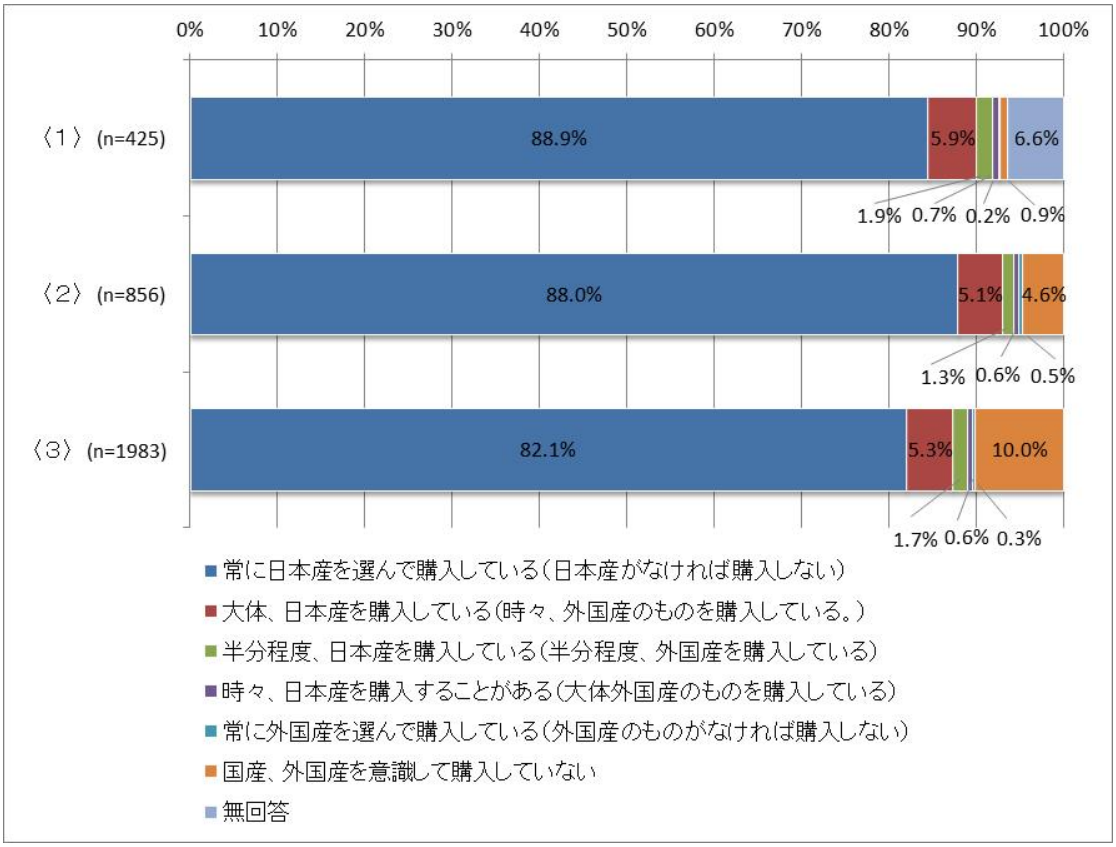
- グループ<3>のおよそ 7 割が「知らなかった」と回答しているのに対し、<1><2>のグループは、過半数が「知っていた」と回答しており、その差が明確になった。
- 「知っていた」という回答は、グループ<1>が最も多かった。



【米】

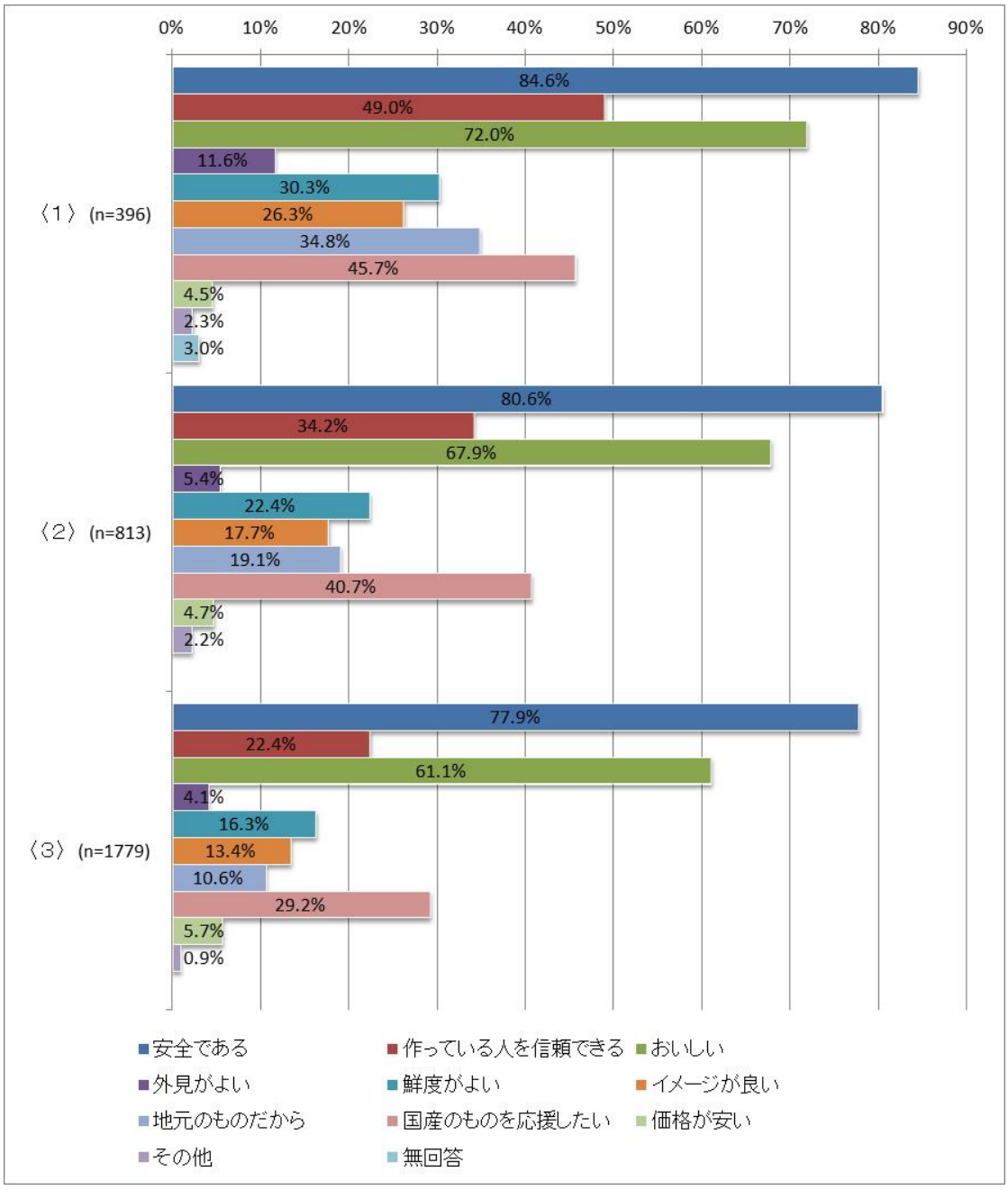
Q11. 同じ種類の食べ物で日本産と外国産がある場合の購入について

- 米の購入についての選好では、どのグループでも 8 割以上の回答者が「常に日本産を選んで購入している」と回答しており、強い国産志向がうかがえる。



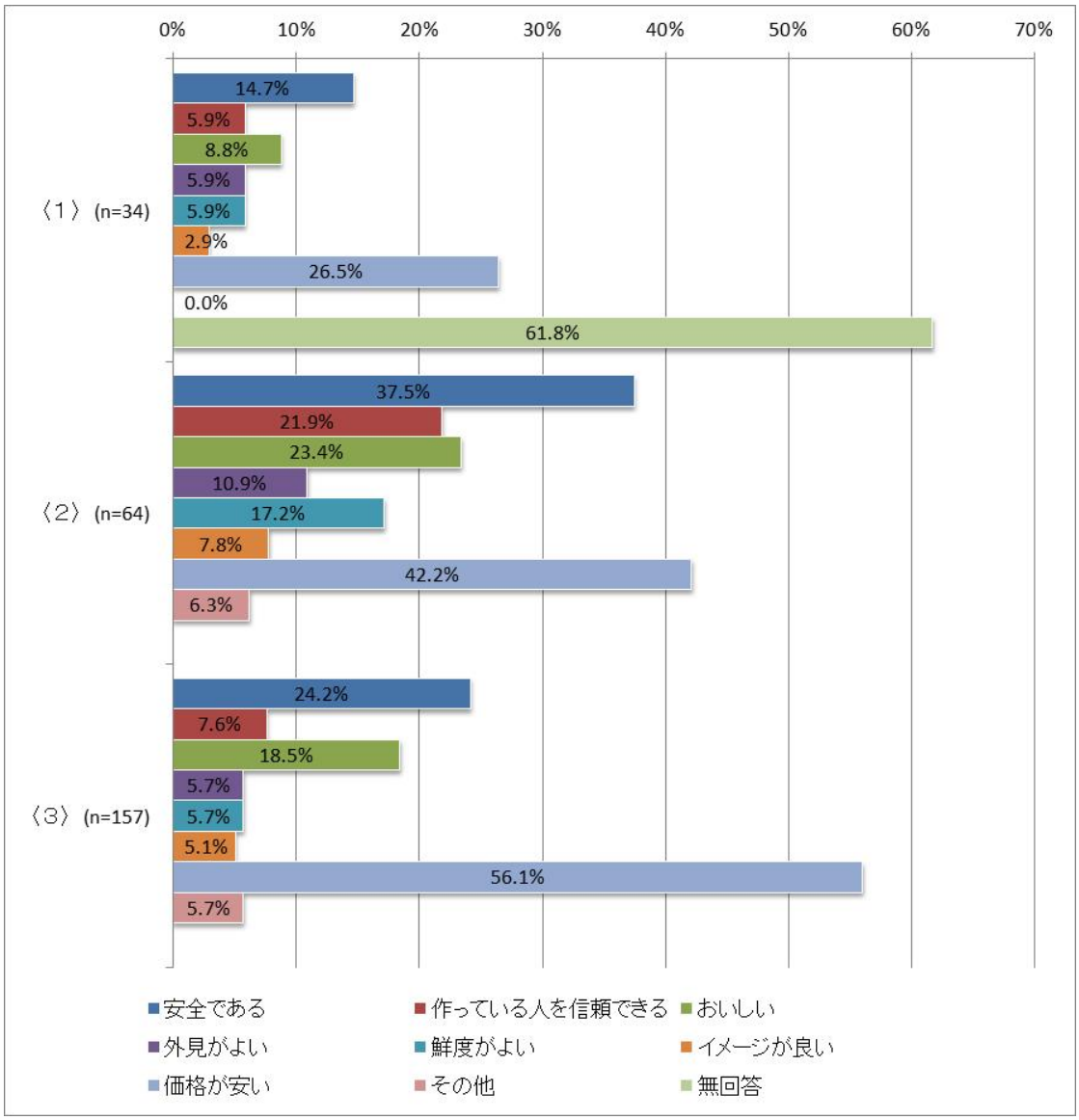
Q12a. 日本産を選ぶ理由（複数回答）

- 米の購入に際して日本産を選ぶ理由は、どのグループにも大きな差はなく、ほぼ 8 割の回答者が「安全である」ことを理由に挙げ、次に「おいしい」ことが多くなっている。
- グループ<1>では、「作っている人を信頼できる」「国産の物を応援したい」といった回答が、他のグループより多い。

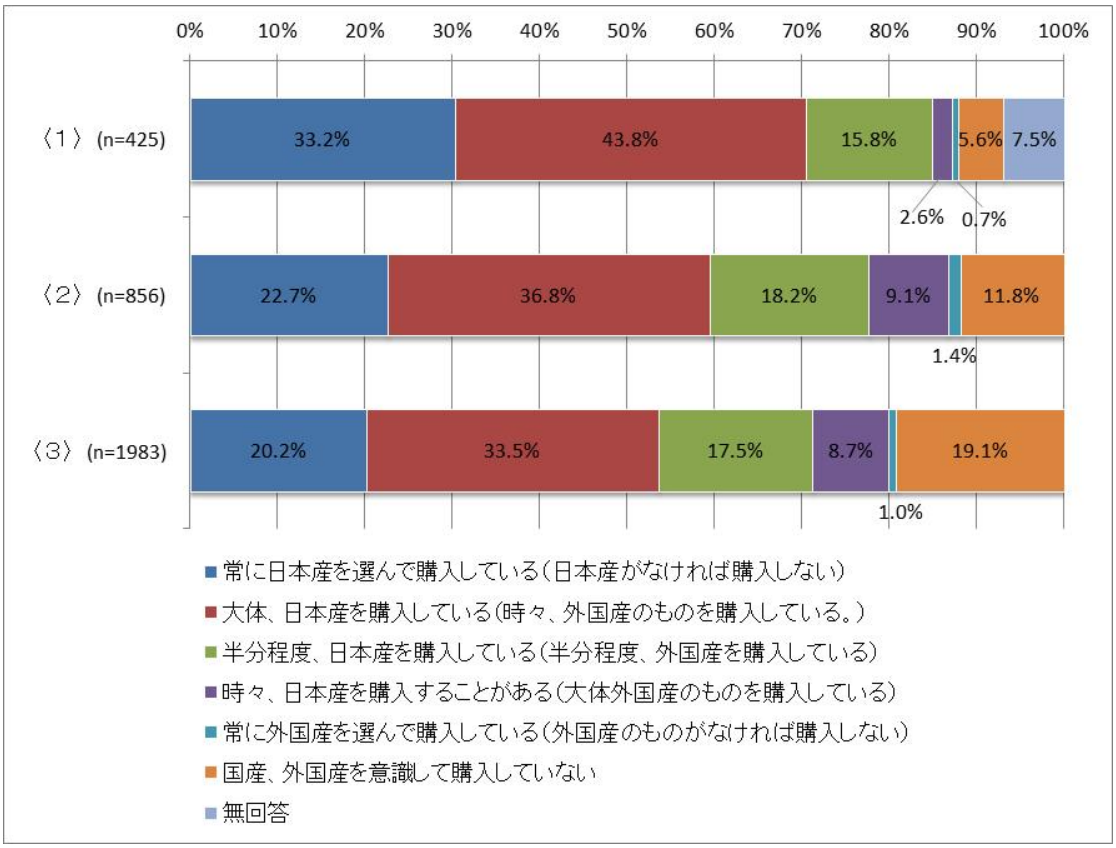


Q12b. 外国産を選ぶ理由（複数回答）

- 米の購入に際して外国産を選ぶ理由としては、どのグループも「価格が安い」ことがもっとも多く、その次に「安全である」という回答が多くなっており、グループによる差は見られない。



【肉類（牛肉や豚肉など）】

Q11. 同じ種類の食べ物で日本産と外国産がある場合の購入について

- 肉類の購入に関する選好では、どのグループも「大体、日本産を購入している」という回答が最も多く、次に「常に日本産を選んで購入している」という回答が多くなっていた。この２つの回答においてグループ<1><2>ともグループ<3>を上回っている。